

マスコミの表現の自由とメディア論

藤井正希*

はじめに

私の第一の研究テーマは、表現の自由（憲法21条1項）との関係で、巨大化、権力化したマスコミを如何に規制していくかという、いわゆるマスコミ規制論にある。その際、私は、自分の専門分野である法律学、とりわけ憲法学からの考察を中心に行ってきた。この点、法律学の世界では、憲法や放送法等の現行法や最高裁の判例を踏まえ、この場合のこのマスコミ規制は合憲・合法なりや否やという形で議論を進めていくことが多い。これはいわば“規範的発想”といえる。それゆえ、メディア自体を直接に考察し、その本質に迫ろうという視点は乏しい。確かに、それは法律学というよりも社会学や哲学の分野の仕事なのであろう。しかし、より実効的で、説得的なマスコミ規制の論理を確立するためには、メディア自体を直接に考察し、メディアの本質に迫ろうという視点からメディアを考察することが是非とも必要であらう。すなわち、憲法や放送法等の現行法や最高裁の判例をメルクマールとしてマスコミ規制の是非を論ずるのではなく、メディアの本質を踏まえたメディア理解をメルクマールとして、あるべき

マスコミ規制を考えるのである。これはいわば“メディアの本質からの発想”といえる。具体的には、マスコミの表現の自由には規制すべき部分と規制すべきではない部分とがあるが、いったん現行法や判例は脇に置き、かかるメディア理解からして、果たして表現の自由をどのように規制したらいいのかを検討するのである。これにより、論理がより説得的なものとなり、理論の実効化を図りうるであらう。

かかる観点に鑑み、社会学や哲学の分野におけるメディア論の中から、以下、①皮下注射針モデル・魔法の弾丸理論、②コミュニケーションの2段階の流れ仮説・限定効果論、③議題設定仮説、④沈黙の螺旋理論、⑤培養理論を取り上げ、検討していく。さらに⑥M・マクルーハンのメディア論については、大幅に紙幅を割いて詳述していく。この点、M・マクルーハンは、社会学の分野でメディア論を専攻している者にとっては、避けては通れない存在であり、その諸著作は、今や古典的地位を占めている。マクルーハン理論は、'60年代に日本を含む多くの国々で一大ブームを引き起こしたものの、'70年代以降、表舞台から姿を消し、一般の人びとからは忘れ去られていった。しかし、21世

*早稲田大学大学院社会科学研究所 2008年博士後期課程単位取得退学（指導教員 後藤光男）

紀となった現在、再びマクルーハン理論が復権しつつある。一世を風靡したものの、短時間で消え去ったマクルーハン理論が、30年以上を経て、再び復活したのは何故か。そこにはメディアの本質を突く普遍的真理が隠されているのではないか。かかるマクルーハン理論を、あるべきマスコミ規制の構築の一助とすべく、その思想の要諦を概観したいと考える⁽¹⁾。

1. さまざまなメディア論

(1) 皮下注射針モデル・魔法の弾丸理論

これはマスメディアが一人ひとりの受け手に無媒介的に作用し、誰に対しても強力かつ画一的な反応を引き起こすと仮定するものである。すなわち、マスメディアが社会に対して強大な力をふるうという見方である [竹下 2001: 13-4]。マスコミの影響力の直接的効果を表すために、「皮下注射」や「弾丸」という言葉が使用されているのである [中田 2003: 12]。この理論は、1938 (昭和13) 年、アメリカの俳優オーソン・ウェルズが、SFドラマ『宇宙戦争』において、火星人侵入の臨時ニュースを流したところ、それが事実と誤解され、全米が大パニックになった事件を引き合いに、主張されることが多い [竹下 2001: 14]。情報の整合性のチェックを試み、それに成功した者だけが途中でニュースが虚構であることに気がつき、そうでなかった者は事実であると信じ続けたのである。こうした聴取行動の相違は、ニュースに対する批判能力の程度から来ている。かかるニュースに対する批判能力は、個人の感受性に規定されるだけでなく、聴取状況の影響等をも被るものである。この事件は、マスメディアからの情報が、視聴者や聴取者による付加的な

チェックがなければ、原則的に真実として受容されてしまうということを示しているといえよう [中田 2003: 11]。

この理論は、憲法学の分野においても、巨大化し、社会的権力となったマスコミの人権侵害の問題を語る場合に、当然に前提とされているといえる。これは、マスメディアに対する世間一般の常識に最も近い見解といえるであろう。この理論からすれば、社会に対して強大な力をふるい、誰に対しても強力かつ画一的な反応を引き起こすマスメディアの表現の自由は個々人の表現の自由と全く異質のものとなり、包括的な規制が許容されうることになる。むしろマスメディアの表現の自由を規制することは、個々人の表現の自由の保障につながることにさえなろう。また、視聴者や聴取者が情報の整合性を付加的にチェックしうる制度的保障が要請されることにもなる。

(2) コミュニケーションの2段階の流れ仮説・限定効果論

この仮説は、マスメディアから発せられた影響力は、最初にオピニオン・リーダーに達し、その次はオピニオン・リーダーが日常生活で影響を与えることができる交際相手に伝わっていくというものである [露木・仲川 2004: 63]。すなわち、個人に対するマスコミの影響力はそれほど直接的なものではなく、オピニオン・リーダー層へ伝達された情報が、彼らの意見のフィルターを通して個人的影響 (パーソナル・インフルエンス) として諸個人へと到達するのであり、よって、マスコミの影響力は非常に限定されていると考える見解である [中田 2003: 12]。この考えは、上述の皮下注射針モデ

ル・魔法の弾丸理論がマスコミの効果の強大性を主張するのに対し、その効果を限定することから限定効果論とも呼ばれている [露木・仲川 2004: 63]。

この理論は、マスコミの社会的影響力を非常に限定されたものとするのであるから、マスコミの表現の自由の包括的規制は帰結されえない。マスコミの情報は、オピニオン・リーダーの意見のフィルターを通して、個人的影響として諸個人へと到達するというのだから、規制されるべきはマスコミではなく、むしろオピニオン・リーダーということになろう。確かに、例えば松本サリン事件のように、オピニオン・リーダーの言説によって、マスメディアの不正や欺瞞が暴かれることも多い。また、社会の衆目の一致するオピニオン・リーダーが存在することも事実である。よって、この理論も真理の一面についてはいる。しかし、果たして本当にマスコミの情報が、常にオピニオン・リーダーの意見のフィルターを通して諸個人へと到達するといえるであろうか。新聞やラジオがメディアの中心であった時代ならばまだしも、現代のインターネット社会では、マスコミから直接的に個人に伝えられる情報の方がむしろ大半であろう。また、オピニオン・リーダーが巨大マスコミ以上の社会的影響力を持っているとは到底、考えられない。この理論は、余りに一面的な見方であると評しえよう。

(3) 議題設定仮説

この仮説は、マスメディアは日々の出来事を選択・制作活動を通じて、いま何が重要なトピックであるのかを提示し、我われの認知に大きな影響力を与えているのであり、人びとの考

えや議論の柱となる議題の設定に大きな役割を演じているというものである [佐藤 1990: 18]。換言すれば、議題設定仮説は、意見や態度変容よりも浅いレベルの効果、すなわち注意の喚起、認知の形成、そして議題や争点の設定において、マスコミが力を発揮するという見解である [中田 2003: 14]。これは、上述の皮下注射針モデル・魔法の弾丸理論のようにマスコミの効果の強大性を主張するのではなく、また、コミュニケーションの2段階の流れ仮説・限定効果論のようにその効果を全般的に限定するのではなく、議題設定という限定された局面におけるマスコミの影響力を強調する点に、その理論的特徴があるといえよう。

この点、マスメディアが、人びとの注意を喚起し、認知を形成させ、そして、国家的な議題や争点の設定に大きく寄与していることは事実であろう。例えば、近時の耐震偽装や食品偽装など、国家を揺るがせた大きな社会問題のほとんどはマスコミ報道をきっかけとしている。かかるマスメディアの国民に対する争点提起機能は最大限に尊重されなければならない。しかし、この見解は、マスメディアは人びとの意見や態度を変えるまでの力は持ちえないとする。すなわち、マスメディアは国家意思形成の端緒とはなるが、マスメディア自体が国家意思を形成することはないという。市民の表現の自由は、十分にマスメディアの表現の自由に対抗しうると考えるのであろう。とするならば、マスメディアの表現の自由を市民のそれと区別して特に規制する必要はないことになる。むしろ、マスメディアの表現の自由を最大限に保障し、多くの争点を提起せしめることが、市民の表現の自由享受に資することになろう。確かに、マ

スコミの国民に対する争点提起機能は重要であろう。しかし、この見解は、マスコミの影響力が議題設定という限定された局面に止まることを強調するが、果たしてそうであろうか。私は、マスコミの影響力は時には個人の意見や態度を変容してしまうほど絶大なものであると考える。

(4) 沈黙の螺旋理論

この理論は、マスメディアがその受け手に及ぼす影響について、マスメディアは受け手の持つ意見を変えることはできないにしても、反対意見を封じ込めることは可能であり、すなわち変更しないまでも受け手を沈黙させる有効な手段になるとするものである [露木・仲川 2004: 52-3]。この見解は、マスコミが受け手の意見・態度レベルにまで大きな効果を発揮することを認める点で、上述の皮下注射針モデル・魔法の弾丸理論に通じる面があることに注意が必要である。すなわち、個人は、マスメディアや周囲の人間の声を通じて意見の分布や世論の動きに気づく能力を持っており、また、自分の意見が孤立化することへの恐怖感を持っている [中田 2003: 14]。よって、多数意見と少数意見の対比において、前者は実際以上に大きく見え、ますます優勢な意見のように思われてくるが、これに対し、後者はますます孤立化の度合いを深めていく。こうした過程は螺旋的に進行する。その結果、少数意見を持つ者は、少数意見を主張することで、社会的に孤立することを恐れ、少なくとも公の場では自分の意見を表明することを差し控え、沈黙を守るようになる [竹下 2001: 41-4]。沈黙の螺旋という理論の名称は、かかる過程を有機的に表現したものといえ

よう。

少数意見を持つ者が社会的孤立化を恐れ、公の場で自分の意見を表明することを差し控え、沈黙を守るようになること、また、マスコミの報道がその現象を助長することも事実であろう。マスコミ各社が揃って一定の論調での報道キャンペーンを行う場合、それに抗して少数意見を公言することは、相当の勇気と覚悟が必要である。いわゆる一連のオウム真理教事件が社会を震撼させ、マスコミの好餌となっていた時に、信教の自由（憲法20条）を盾にオウム真理教を擁護する意見がほとんどマスメディアから聞かれなかったことからしても、そのことは明らかであろう。この理論からすれば、少数者の表現の自由を保障するために、マスコミの表現の自由を規制すべきことになる。しかし、この理論も、マスメディアが受け手の持つ意見を変えることはできないとしている点で、前述の議題設定仮説と同様、マスコミの社会的影響力を過小評価しているように思われ、その点で十分なものとは言い難いと考えられる。

(5) 培養理論

これは、マスメディア、とくにテレビは同一メッセージへの長期的、反復的、非選択的な接触を通じて、高接触者の間に共通の世界観、価値観を培養するとする理論である [中田 2003: 14]。この理論は、マスメディアの中でも、特にテレビに特化して、その影響を追及する点で、これまで述べてきたメディア論とは異なっている。すなわち、テレビは長時間にわたり、我われに多くの物語を告げ、もはや家族の重要なメンバーとなっており、テレビから反復・継続的に提供される大量のメッセージとい

メージは、共通の象徴的環境の主流を形づくっている。このように、我われの社会の中で、テレビが中心的な文化的武器の地位を占めていることが、この仮説の理論的支柱といえる [佐藤 1990: 37-9]。

確かに、マスメディアが、人びとに同一・大量のメッセージとイメージを提供することを通じて、人びとの間に共通の世界観、価値観を培養するとする理論は、まさにテレビというメディアに最もよく当てはまるであろう。すなわち、テレビは映像メディアであり、視覚と聴覚に同時に訴えるものであり、その迫真性・衝撃性は強い（いわゆるテレビの迫真性・衝撃性）。また、テレビは、各家庭の各部屋に侵入しており、近親性も高い（いわゆるテレビの近親性）。さらに、放送は、電波を利用するメディアであることから特許産業であり、誰でも始められるものではなく、有限性もある（いわゆるテレビの有限性）。これまではテレビが文化を形づくってきたといっても過言ではあるまい。よって、培養理論は基本的には妥当なものとして評しえよう。この理論からすれば、世界観や価値観の多様性を確保するため、テレビを何らかの形で規制することが要請されよう。

ただし、現代のインターネット社会においては、その状況に大きな変化が生じつつあることを認めざるをえない。というのも、我われはこれまでテレビに費やしてきた時間の多くを今やパソコンに費やすようになってきているからである。今後、中心的な文化的武器の地位を占めるのは、テレビではなく、パソコンであることは間違いない。パソコンは、テレビとは異なり、双方向性・多様性・匿名性という特性を持つ。この点、パソコンには、テレビほど、人び

との間に共通の世界観、価値観を培養する機能はない。むしろ、ネット上で様ざまな意見が取り交わされることにより、世界観、価値観の分裂がもたらされるであろう。よって、パソコンが一般に普及すればするほど、テレビの培養機能は相対的に低下すると考えられる。今後は、テレビ規制よりも、ネット規制が課題となる。

2. マクルーハン理論

(1) メディアとは

マクルーハンは、メディアという概念の把握の仕方において、既に他の多くのメディア論とは大きく異なっている。この点、①マクルーハンは、様ざまなものをメディアの名の下に一緒くたにして議論を展開している。ラジオ、テレビ、新聞は言うに及ばず、自転車、自動車、飛行機、また、時計、衣服、住宅、さらには、貨幣、数、オートメーション、兵器までもがメディアとして考察の対象になっている。そして、②マクルーハンは、メディアを人間の身体、精神などの拡張と捉えた。テレビやラジオは中枢神経組織（聴覚）の電氣的拡張である。また、自転車や自動車は人間の足の拡張であり、衣服は皮膚の拡張であり、住居は肉体の体温調節メカニズムの拡張である。さらに、貨幣は交換したいという衝動の拡張であり、弓矢は手と腕の拡張である [McLuhan 1964: 77-359]。そして、③マクルーハンは、言語であれ、法律であれ、思想であれ、仮説であれ、道具であれ、衣服であれ、コンピュータであれ、人間が手を加えた人工物は、すべて物理的な人間の身体および精神の拡張物であり、メディアだとまで言い切る [McLuhan 1988: 93]。そして、④マクルーハンは、単純に拡張だけが行われるのではなく、拡

張された必然的な帰結として、衰退が生じ、切断をもたらすと主張する。すなわち、拡張は切断と表裏一体なのである。例えば、人間の足の拡張たる車輪というメディアは、人間に対して、一面では、高速移動・高速運搬の能力を附与しているにもかかわらず、他面では、歩くという人間の基本機能を麻痺させ、むしろ人間を歩けなくさせているのである。このように、新しいメディアは、我われに拡張と切断の両方をもたらすというのが、マクルーハンの主張なのである [Gordon 1997: 64-5]。

マクルーハンは、一見、あらゆるものをメディアに含めているかのように思えるが、マクルーハンによるメディアとは、人間の生み出した技術（テクノロジー）の別名であり、人間の所与の能力を何らかの形で外化したもの、拡張したものなのである。そして、そのメディア概念は、①純粋にコミュニケーションに用いられるメディア（例、テレビやラジオ＝“電気テクノロジー”）と、②それ以外の能力拡張としての技術メディア（例、活版印刷術＝“グーテンベルク・テクノロジー”）との二つに大別する [中田 2003: 18]⁽²⁾。我われは、前者の純粋コミュニケーション・メディアとしてのテレビやラジオ、新聞、雑誌などのことを通常、「メディア」と呼んでいるのである。マスコミ規制という私のテーマからすれば、前者が中心的な考察の対象となる⁽³⁾。このように、マクルーハンは、メディアを表現の自由という視点からは全く考察していない。すなわち、表現の自由を行使して我われに情報や知識を伝達してくれる機関がメディアであるという発想は全くない。メディアをテクノロジー一般と同一視する以上、それも止むを得ないといえる。よって、マ

クルーハンが、純粋コミュニケーション・メディアの表現の自由を規制することについて、いかなる立場に立つのかは明らかではない。しかし、テレビやラジオが聴覚の電氣的拡張であり、その必然的な帰結として、聴覚の衰退が生じ、聴覚の切断がもたらされるというのだから、テレビやラジオの表現の自由を規制することについて、前向きな立場であると推測することは可能であろう⁽⁴⁾。

(2) 「メディアはメッセージである」

メディアの言語的意味は「媒体」であり、媒体とは、何かと何かを媒介するものという意味である。すなわち、ある者からある者へとメッセージを媒介するのがメディアである。メッセージはメディアによって運ばれるのであり、メディア自体がメッセージであるはずがない。それゆえ、我われは、メディアが伝達する情報の内容（コンテンツ）に注目し、それをもとにメディアの功罪を議論するのが通常である。情報を送る側も受け取る側もそれを当然のこととし、何の疑いも持たない。例えば、テレビを見るときには、ニュースの中身が問題であって、テレビがどのようにニュースを送るメディアであるかということに、いちいち注意を払う人はいないのである [中田 2003: 33]。これに対して、マクルーハンは、どんなメディアの場合でも、メディアが個人および社会に及ぼす結果は、新しい技術が我われの世界に導入する新しい尺度に起因すると主張する。すなわち、メディアそれ自体がある種のメッセージを既に含んでおり、メディアのメッセージの送り方そのものが、メディアの伝達内容とは無関係に、むしろメッセージとなって、人びとの新た

な思考や行動を生み出す源泉になる等、人間や社会に大きな影響を与える。例えば、新聞の紙面は、政治の記事の隣に殺人事件の記事があったり、その下に商業広告があったり、紙面が不連続なモザイクのようになっているため、読者は、こうしたモザイク的、不連続的な認知の仕方に慣れ、そこから、モザイク的、不連続的な思考形式が生まれてくるとする [McLuhan 1964: 7-30]。マクルーハンにとってのメディアは、社会に対するメッセージそのものなのである。よって、メディアの本質を理解するためには、伝達内容とは切り離して、メディア自体を考察の対象としなければならない [竹村 2002: 114-7]。

例えば、パソコンのインターネットは、情報がWorld Wide Web（世界中に張り巡らされた蜘蛛の巣）の上を縦横無尽に駆け巡るメディアであり、そのメッセージの送り方そのものが人間の思考や行動に大きな影響を及ぼしていると考えられる。メディアが持つメッセージの送り方そのものが、メディアの伝達内容とは無関係に、むしろメッセージとなって、新たな思考や行動を生み出す源泉になるというマクルーハンの主張は、現代におけるメディア規制を考える上でも、十分に有用な視点といえる。この点、かかる発想は、憲法学の分野における、表現の自由規制の二形態たる①内容規制と②内容中立規制の区分論に親和性を有する。すなわち、メディアが持つメッセージの送り方そのものが、メディアの伝達内容とは無関係に、むしろメッセージとなって、新たな思考や行動を生み出す源泉になっているのであれば、まさにメディアの表現の自由を内容中立規制（時・場所・方法についての規制）すべき場合といえるからであ

る。憲法上、内容中立規制は内容規制よりも緩やかな条件で認めうることから、この点でも、マスコミ規制に前向きな立場を読み取ることができよう。ただし、メディアの効果は、果たしてマクルーハンの主張するように、メディアの伝達内容とは全く無関係なのだろうか。やはり、メディアの伝達内容からメディアの本質を分析するという視点も必要不可欠であると私は考える。

(3) さらに「メディアはマッサージである」

マクルーハンは、メディアがメッセージであるだけでなく、さらにマッサージであると主張する。「メディアはメッセージである」という表現は常識的感覚で理解することができるが、「メディアはマッサージである」という表現は刺激的であり、また、一見、奇抜でもあり、常識的感覚では受け入れ難いところがある。この点、マクルーハンは、その著書『メディアはマッサージである』の中で、大要、次のように主張する。すなわち、人間の身体および精神の拡張としての技術たるメディアは、個人的、政治的、経済的、美的、心理的、道徳的、倫理的、社会的な出来事のすべてに深く浸透している⁽⁵⁾。そこで、メディアは、いわばマッサージ嬢のように、我われのどんな部分にも触れ、全身感覚に訴え、心理的マッサージをすることになる。さらに時には、我われを徹底的に叩きまくるのである。また、メディアは、環境を変えることにより、我われに特有な感覚比率を生み出すのであり、どれか一つの器官の延長は、我われが考え、行為する方法、すなわち世界を認知する方法を変えるのである。その結果、メディアは、我われに強い影響を及ぼ

し、すみからすみまで我われを変えてしまう。こうした環境としてのメディアが人間に及ぼす効果を理解しなければ、社会や文化の変化を理解することは決してできないのである。その意味で、メディアはまさにマッサージなのである [McLuhan・Fiore 1967: 26]。このようなメディアのマッサージ効果を知りたければ、ニューヨークで半年も大停電が続くと仮定してみればよい。そうすれば、メディアが我われの生活のあらゆる瞬間をいかに形成し、作用し、変えているか、つまりマッサージしているかが、すぐに分かるであろう [McLuhan・Fiore 1967: 148]。

マクルーハンは、全身感覚に訴え、我われを変えてしまうメディアをマッサージ嬢にたとえ、メディアの影響を心理的マッサージと表現しているが、極めて個性的かつ絶妙な言説といえる。かかる表現に最も相応しいメディアは、まさにテレビであろう。マクルーハンがテレビというメディアに一目置いていたことは、次節で述べる通りである。この点、テレビやパソコンというメディアが、人間社会を大きく変えた、あるいは、変えつつあるということを否定する者は皆無であろう。その点で、環境としてのメディアが人間に及ぼす効果の絶大性を説くマクルーハン理論には、全体として誤りはなかる。そして、マクルーハン自身は全く言及していないが、かかる理解を前提にすれば、人間に及ぼす効果の絶大性ゆえに、純粹コミュニケーション・メディアに対して、完全なる表現の自由を認めることはできず、その動きを適正化するために、何らかのメディア規制が必要となろう。しかし、メディア環境からの影響が、マクルーハンの言うように、我われをすみから

すみまで変えてしまうほど、また、人間の役割を常に決めてしまうほど決定的な力を持つかどうかは疑問であり、その影響力の強弱については再検討の余地があろう。

(4) マクルーハンのテレビ論

それでは、マクルーハンはテレビを具体的にどのようなメディアと捉えていたのであろうか。この点、マクルーハンは、その著書『メディアの理解』の中で、テレビとコンピュータを最高度のメディアと位置付け、とりわけマッサージ効果を強く持つメディアとして、テレビに一目置いていた。具体的には、テレビを、中枢神経組織の最近における、最も華々しい電氣的拡張と述べている。そして、テレビの特殊性を念頭に次のごとく主張する。すなわち、すべての電氣的現象においては、視覚的なものは、複雑な相互作用の中の一構成要素であるに過ぎない。情報の時代にあつては、ほとんどの相互作用は電氣的に処理されるので、電気メディアは、西欧の人間に、視覚的要素のかなりの減少と、それに応じた他の感覚活動の増大という経験をもたらしたのである。テレビの場合には、テレビによって、能動的、探索的な触覚の延長が起こるが、この触覚は、単なる視覚だけの延長とは異なり、我われの全ての感覚器官を深層の同時的相互作用に関与させるものである。テレビは、一般に考えられているような視覚的メディアというよりも、むしろ聴覚的・触覚的メディアであり、何時でも聞こえる耳と何処でも見える目とによって、人間の感覚系を完成させたのである。テレビは、バックグラウンドとしての働きはせず、人間の全存在の深層における参加と関与を要求し、人間全体を関係さ

せる。そこにおいて、人間は、もはやテレビとの“共存”から逃れられない。それゆえ、テレビは、生活と出来事の形と意味に対する我われの意識を、極端にまで敏感にさせ、その結果、非常に多くの人々がテレビによって自分のアイデンティティーがおびやかされたと感じるようになったのである。テレビに比べれば、新聞、映画、ラジオなどは、まるで消費者に対し単なる商品の包装部分を提供するものに過ぎないであろう [McLuhan 1964: 308-337]⁽⁶⁾。そして、マクルーハンは、何かの事件を取り上げ、それに多数の者を共同的に参加させるテレビの力を、最も強烈に証明した例として、故ケネディ大統領の葬儀を挙げている。この時テレビは、まさに全国民を故ケネディ大統領の葬儀に参加させたのである。テレビとは、いわば「あらゆるものが同時に存在する世界」なのである [McLuhan・Fiore 1967: 125]。

さらに、マクルーハンは、テレビに対してこう警告する。すなわち、テレビは既存の世界の輪郭を不鮮明にする、「近視」のメディアであり、精神の絶対的高潔さのみではバクテリアが防げないと同様、テレビに抗うには、活字などの関連するメディアを解毒剤として摂取しなくてはならないと説く。また、モザイク的テレビ映像の浸透を受けたテレビっ子は、文字文化とは対照的な精神で世界に向かい合うことになってしまうのであり、ただ単に教育にテレビを採り入れても、その影響を拡充することはできず、どっちつかずの結果が出てくるに過ぎないとする。しかし、その一方で、マクルーハンは、テレビは何よりも、創造的・参加的反応を要求するメディアであり、プロセスの相互作用やあらゆる種類の形式の発展を、他のメディア

では到底、実現不可能なやり方で具体的に例示することができるとし、テレビというメディアを単に理解するに止めるのではなく、教育において豊かな可能性を開発することのために積極的に活用すべきこともまた説いているのである [McLuhan 1964: 308-37]。

テレビが、生活と出来事の形と意味に対する我われの意識を、極端にまで敏感にさせ、その結果、非常に多くの人びとがテレビによって自分のアイデンティティーがおびやかされたと感じるようになったというマクルーハンの主張は真理の一面を突いている。今やテレビは、一家に一台どころか、一人一台の時代であり、スイッチ一つで、四六時中、迫真的、衝撃的なカラー映像を放出し続けている。とりわけ、批判能力が乏しい子どもは、テレビの映像に曝され続けることにより、アイデンティティーが危殆に瀕しかねないであろう。マクルーハンは、テレビの悪影響をバクテリアにたとえ、テレビに抗うには、活字などの関連するメディアを解毒剤として摂取しなくてはならないと主張するが、それだけでは不十分であり、やはり何らかの規制が要請されよう。テレビ規制を考える場合には、テレビには前述したような①迫真性・衝撃性、②近親性、③有限性等の他のメディアにはない特性があることから、他のメディアとは異なる配慮が必要となることに注意すべきである⁽⁷⁾。さらに、映像メディアとしてテレビの特性をほぼそのまま引き継ぎ、テレビからメディアの首位たる地位を奪いつつあるパソコンの規制も必要となろう。テレビやパソコンは、その活用の仕方次第で、人間の潜在的資質を創造的に引き出すことができるメディアである。この点、マクルーハンは、テレビの肯定面と否

定面をともに踏まえた上で、教育において豊かな可能性を開発することのためにテレビを積極的に活用すべきことを説いている点は、大いに評価しうると考える⁽⁸⁾。

(5) グローバル・ヴィレッジ (地球村) の思想

「電子技術による新しい相互依存は、世界を地球村のイメージで創りかえる」[McLuhan 1962: 31-2]、すなわち、新しい電子メディアがもたらした相互依存関係が、地球全体を一つの村に再創造させると考え、マクルーハンはそれをグローバル・ヴィレッジ (地球村) と名付けた [McLuhan・Fiore 1967: 67]。これはまさに、地球大の規模における部族的相互依存関係の復活といえよう [浜 1996: 99]。この点、マクルーハンは、次のように説く。すなわち、テレビが人をインボルブする力は、世界を一つの村に縮めてしまうほどに強大であり、自分に関わりのない他人というものは一人もいなくなって、地球全体が一つの村となってしまう。地球上で起こる全ての事変は、グローバル・ヴィレッジ全体の問題となり、それに関わりを持たない人は一人もいなくなる。ここにおいては、国家や社会、地縁や血縁という概念は消失し、地球には、地球村に住む地球村民のみしか存在せず、人間はまさに原始時代人に回帰することになるのである [竹村 2002: 129]。そして、グローバル・ヴィレッジにおける環境は、人類と電子メディアとのさらに強烈な相互作用を経て再構成されるのであるが、それは人類という部族が本当の意味で一つの家族となり、人間の意識が機械文化の呪縛から解放され、宇宙を自由に移動できる環境だとする [Gordon 1997: 111-4]。よって、グローバル・ヴィレッジにおける地球村民

の意思は、互いに深く関連し、関与している共同体の全構成員の同時的相互作用を通じて、合意に基づいて表現されることになる。しかし、マクルーハンは、電氣的メディアによって創り出されるグローバル・ヴィレッジ的な状況は、かつての機械的に標準化された社会以上に断絶、多様化、分裂をかきたてるとする。実際、グローバル・ヴィレッジにおいては、愛や調和、静謐や統一性などよりも、不和や紛争、意見の不一致などがより多く存在している。これは、グローバル・ヴィレッジが部族的社会である以上、むしろ当然のことであり、どのような部族的な人びとにとっても、ありふれた生き方だといえるとする⁽⁹⁾。だからこそ、マクルーハンは、グローバル・ヴィレッジにおいては、建設的対話や創造的対話が必要不可欠となると考えるのである [有馬 2007: 15-58]⁽¹⁰⁾。

マクルーハンは、グローバル・ヴィレッジにおける地球村民を原始時代人にたとえ、そこにおける社会を部族的社会と呼んでいる。そして、グローバル・ヴィレッジでは、人類という部族が本当の意味で一つの家族になるのだから、愛や調和、静謐や統一性がもたらされるのかと思いきや、実はそうではなく、むしろ断絶、多様化、分裂による不和や紛争、意見の不一致がより多く存在しているとする。メディアによる世界の一体化 (いわゆるグローバル化) が進展すればするほど、人びとが個体として社会に浮遊してしまう (いわゆるアトム化) という逆説がそこにはある。パソコンや携帯電話で多くの友達とつながっている一方で、孤独感、疎外感を感じる現代人が多いというのも、マクルーハンの指摘の正当性を裏付けよう。それゆえ、マクルーハンは、建設的対話や創造的対話によ

る合意形成の必要性を強調する。かかる対話が十全に行われるためには、表現の自由行使のいわば交通整理として、やはり純粹コミュニケーション・メディアに対する何らかの規制が必要となろう。現代社会においては、インターネットによるWorld Wide Webにより、マクルーハンの予想以上に、グローバル・ヴィレッジ化現象が進展している。地球上で起こる全ての事件は、地球規模における相互依存関係により、地球上の全ての人間に影響を与える。かかる社会においては、メディア規制についても、グローバル・スタンダードの確立が急務となろう。

3. 結 論

以上、述べてきたように、社会学や哲学の分野ではさまざまなメディア論が主張されているが、いずれの仮説・理論も、論者の価値観が色濃く反映されており、独創性に富んでいる。そもそもメディアというものは、人間と同様、多面体なのだから、その評価が分かれるのはむしろ当然であろう。どの説が正しく、どの説が誤りであるという問題では決してなく、どの説も真理の一面を突いており、両立可能で、相互に排斥し合うというものではなからう。しかし、そのことを前提にして私見を述べるならば、メディアの強い影響力を肯定する皮下注射針モデル・魔法の弾丸理論およびテレビを特別なメディアと見る培養理論とが、より多くの真理を体現しているのではないかと考える。この点、マクルーハンも、両理論に親和的な主張をしていることは、以上に見た通りである。そして、マクルーハン理論の意義としては、①メディアが物理的な人間の身体および精神の能力の拡張であるという独創的な視点から、メディアの功

罪を論じたこと、また、②メディアそれ自体が伝達内容とは無関係のメッセージとして社会環境を形成し、人間社会の深部で深い影響を与えるという主張を世界で最初に行い、伝達内容を捨象して、コミュニケーションを媒介するメディアそのものの本質を分析するという方法論を提示したこと、および、③新しい電子メディアがもたらす相互依存関係が、地球全体を一つの村に再創造させると考え、それをグローバル・ヴィレッジ（地球村）と名付け、インターネット社会の到来を予言したこと、これらの三点にあると考える⁽¹¹⁾。旧来の憲法上の議論では、表現の自由の優越的地位論に基づき、マスメディアの表現の自由を政策的に規制することは禁忌視されてきた。確かに、憲法学の通説の説くように、表現の自由には、①個人の自己実現の価値、②国民の自己統治の価値、③思想の自由市場の実現等、さまざまな意義があり、表現の自由を制限することは必要最小限度でなければならないことはもちろんである。しかし、だからと言って、表現の自由に対して、消極的・警察的規制以外の、積極的・政策的規制を一切、認めえないということにはならないであろう。前述の皮下注射針モデル・魔法の弾丸理論や培養理論、そしてマクルーハン理論からするならば、むしろマスメディアの表現の自由を積極的・政策的に規制することが要請されると解される。

この点、具体的には、メディア規制を考えるにあたり、マクルーハン理論の意義①はメディアの意義を再検討する際の有力な視点としたい。すなわち、メディアが物理的な人間の身体および精神の能力の拡張であるならば、巨大化し権力化したマスコミは、まさに巨大な目・

口・耳を備えた“モンスター”であろう。それに対して、我われ市民は、いわば“こびと”であろう。そんなモンスターを果たして社会に野放しにしているのだろうか。モンスターがこびとの味方であるうちはいいが、何らその保証はない。モンスターが何時の間にか権力の側に立っているということはないのか。近時のいわゆる記者クラブの弊害の問題を見聞するにつき、私はその危険性を痛感する。やはり、こびとの表現の自由を十分に保障するためには、モンスターの表現の自由に対して、ある程度の法的規制は必要であろう。また、意義②については、あるべきメディア規制の態様を考える際、メディアそれ自体のメッセージとメディアの伝達内容のメッセージとに分けて、メディアの影響力を検討したい。すなわち、これまでの憲法学では、たとえ同じ表現内容であっても、伝達の仕方により、その影響が異なるという視点は余り意識されてこなかった。例えば、「AはBである」というメッセージを伝達する時、①文字で伝えるか（新聞・雑誌等）、音で伝えるか（ラジオ・CD等）、映像で伝えるか（テレビ・インターネット等）。また②たとえ文字で伝達するにしても、新聞か、週刊誌か、新書か、単行本か、ミニコミ誌か、チラシか。そして③たとえ新聞で伝達するにしても、トップ記事か、社会面か、文化面か、コラムか、ベタ記事か。さらに④たとえ社会面で伝達するにしても、上段か・中段か・下段か、前後の記事は何か。その如何によって、「AはBである」という表現の要保護性はどれだけ異なりうるのだろうか。表現の自由を考える場合に、とても示唆に富む視点といえる。さらに、意義③については、インターネット規制を考える際の、思考の前提と

して採り入れたいと考える。すなわち、インターネットにより、グローバル・ヴィレッジ化が進展すればするほど、対話による合意形成が必要となるのにもかかわらず、対話ができる環境が社会から消失していく。フェイス・ツー・フェイスで、お互いの温もりや息づかいを感じながらの人間の対話は極めて困難となる。ネット上の会話で全てを済ませ、友達と直接、ろくに会話をしたことがない小学生が、果たして建設的対話や創造的対話ができるだろうか。電子政府・電子自治体の出現も近いと言われているが、社会が何処までネットに依存すべきかを再検討する必要がある。地球村の合意形成のために、いかにインターネットを活用し、また、規制していくか。グローバル・スタンダードでのルールの確立が急務であろう。

[投稿受理日2008.5.24/掲載決定日2008.6.16]

注

- (1) 1967（昭和42）年に、『マクルーハンの世界』という本で、いち早くマクルーハン理論を日本に紹介し、日本での大ブームの切っ掛けを作った竹村健一はその著書の中で、次のようにマクルーハンを紹介している。

「1911～80年。カナダの英文学者、文明批評家。カナダのマニトバ大学卒業後、イギリスに留学。イギリス中世、ルネサンス文学の学者だったが、1960年代以降、メディアの問題を中心とした文明論を展開する。広範な領域をメディアの観点から論ずるユニークな文明批評家として世界的に有名になった。」[竹村 2002:3]

すなわち、マクルーハンとは日本で言えば、明治44年から昭和55年までを生きた人であり、青年期がちょうど昭和初期に該当する。よって第一次と第二次との二つの世界大戦を経験していることになる。とりわけ第二次世界大戦の経験は、マクルーハンの思考に大きな影響を与えたであろう。また、カナダで生まれ、イギリスで学んでおり、英語文化圏の文化的素地があるといえる。そして、

マクルーハンの研究がイギリス中世・ルネサンス文学という英文学から始まっていることは特筆に値する。実際、マクルーハンは、イギリスのケンブリッジ大学から文学博士の学位を得ている [南 1995: 162]。そして、マクルーハンは、カナダのトロント大学を拠点に、その理論を展開したことから、メディア論の世界ではトロント学派と称されている [北田 2004: 60]。

- (2) テレビやラジオを電気テクノロジーと、活版印刷術をグーテンベルク・テクノロジーと呼ぶのは、マクルーハン自身の用語法である [McLuhan 1962: 229-231]。この点、マクルーハンは、コミュニケーション・メディアによる時代を次の四つに区分している。まず、話し言葉のみが使われた①口誦時代である。最も原始的なメディア時代と言える。次に、写本が使われた②書かれた文字の時代である。人間が文字というメディアを獲得した時代である。さらに、マクルーハンがグーテンベルク・テクノロジーと呼ぶ③活版印刷の時代である。ここにおいて人間は、反復可能なメディアを獲得したのである。そして最後に、テレビやコンピュータなど、④電気メディア・電子メディアの時代である。マクルーハンは、テレビとコンピュータを最高度のメディアと位置付けていた [McLuhan 1964: 308-37]。
- (3) ドイツの社会心理学者ゲルハルト・マレッケは、1960年代後半（昭和40年代前半）に、マス・コミュニケーションを「メッセージが、公的に、技術的手段を通して、間接的に、かつ一方的に、分散している聴衆にあてて、伝達されるコミュニケーション形態」と定義し、これに基づき、マスコミとして、①プレス（新聞・雑誌等）、②映画、③レコード、④ラジオ、⑤テレビジョンの五つを導いた [G・マレッケ 1965: 58-60]。この点、科学技術が日進月歩する現代社会においては、マスメディア概念は次第に拡大してゆく傾向にあることに注意が必要である（いわゆるマスメディアの多様化現象） [関口 2000: 1-3]。今後は、携帯電話やパソコンもメディア規制の対象とせざるをえないであろう。
- (4) マクルーハンは、テレビとラジオとにおける、メディアとしての違いを、熱い（ホット）と冷たい（クール）という概念を使って説明している。すなわち、ラジオは熱いメディアであるのに対し

て、テレビは冷たいメディアだというのである。前者は、受け手（聴取者・視聴者・利用者など）による補完性が低いのに対して、後者は、受け手による補完性が高いのが特徴という。よって、熱いメディアは、受け手が参加する余地があまりないが、一方、冷たいメディアは、受け手が参加する余地がかなりあることになる [McLuhan 1964: 22-32] この理論については、マクルーハン理論の中心原理としてもてはやされた反面、様々な方面から批判や非難が相次いだとの指摘がある [中田 2003: 34]。また、このホットとクールという概念は、むしろ排他的なものというより相対的な傾向を示すものという程度に考えるべきだとの指摘もある [吉見 2004: 75]。このホットとクールという概念以外に、通常、マクルーハン理解に必須の論点とされているものとしては、メディアが社会に、強化→衰退→回復→反転をもたらすとする、いわゆるテトラッド論 [McLuhan 1988: 129-30] や人間における五感のあいだの関係の変化と文化社会の変容とを関連付ける、いわゆる感覚比率論 [McLuhan 1962: 42-4] などが挙げられる。

- (5) 前述したごとく、マクルーハンは、人間が手を加えたすべての人工物をメディアだと言い切るのだから、当然このように言えることになる。
- (6) マクルーハンは、テレビと映画とにおける、メディアとしての違いを、光の性質という観点から説明している。すなわち、映画の映像の場合には、スクリーンの上に当てられた光によって出現するのであり、人間はスクリーンに投射されている影を見ている。そのため、我われは映像が提供する情報を一括して引き受けることができる。これに対して、テレビの映像の場合には、テレビの中を通ってくる光によって出現するのであり、人間は光の刺激の集中砲火を浴びる。テレビの場合、映画のスクリーンにあたるのが人間である視聴者なのである。そのため、我われは映像が提供する情報のほんのわずかししか引き受けることができない。この点、マクルーハンは、テレビの映像と映画の映像には、全く共通点がないとまで言い切っている [McLuhan 1964: 308-37]。
- (7) テレビを始めとする放送メディアは、電波を利用することから、特許産業であり、有限性という特性があるとされてきたが、衛星放送による、いわゆる多チャンネル化により、有限性は薄れてき

ていることに注意が必要である。

- (8) この点、マクルーハンのテレビについての議論は、テレビが普及し始めて間もない時期の初期的な経験を材料にすることしかできなかったため不十分なものとどまっているとの指摘もある [和田 2004: 136]。マクルーハン理論が、時代的制約からくる不十分さを持っていることは、紛れもない事実であろう。
- (9) マクルーハンのような楽観的なグローバル・ヴィレッジという見通しは、テクノロジーの持つポテンシャルに全て任せて解決させるという、一種の偶然に委ねるため、権力浸透のリスクが大きいと考えなければならないという指摘もある [池田 2006: 198]。
- (10) この点、クリストファー・ホロックスは次のように指摘している。すなわち、メディアがもたらす破壊的な結果という問題は、マクルーハンの仕事を評価するさいに無視されがちである。グローバル・ヴィレッジについて述べた彼の主張の、一元的で、透明で、弁証法性を欠く側面を強調し過ぎることは危険である。この考え方の中には、矛盾と葛藤が確かに存在している [Horrocks 2005: 53-54]。
- (11) 例えば、イギリスにおけるカルチュラル・スタディーズのメディア研究者であるレイモンド・ウィリアムズは、マクルーハンによるメディア把握の決定論的傾向を激しく批判した [吉見 2004: 87-93]。また、ホロックスは、マクルーハンが、①メディアの伝える内容の検討には意味がないのだとして、一顧さえしなかったこと、また、②マスメディアの政治経済性に取り組む姿勢を欠いていたことを挙げ、マクルーハン批判を展開している [Horrocks 2005: 73-74]。

参考文献

- Marshall McLuhan [1967] *The Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*, The Vanguard Press, INC. (邦訳・井坂 学 [1968] 『機械の花嫁』竹内書店)
- Marshall McLuhan [1962] *The Gutenberg Galaxy*, University of Toronto Press (邦訳・森 常治 [1986] 『グーテンベルクの銀河系』みすず書房)
- Marshall McLuhan [1964] *Understanding Media: The Extensions of Man*, The MIT Press (邦訳・栗原 裕、河本伸聖 [1987] 『メディア論』みすず書房)
- Marshall McLuhan and Edmund Carpenter [1960] *Explorations in Communications*, Beacon Press (邦訳・大前正臣・後藤和彦 [1981] 『マクルーハン理論』サイマル出版会)
- Marshall McLuhan, Quentin Fiore [1967] *The medium is the message*, New York: Bantam Books. (邦訳・南 博 [1995] 『メディアはマッサージである』河出書房新社)
- Marshall and Eric McLuhan [1988] *Laws of Media: The New Science*, University of Toronto Press (邦訳・中澤 豊 [2002] 『メディアの法則』NTT出版)
- Corinne McLuhan and Bruce R. Powers [1989] *The Global Village: Transformations in World Life and Media in the 21st Century*, Oxford University Press, Inc. (邦訳・浅見克彦 [2003] 『グローバル・ヴィレッジ』青弓社)
- Eric McLuhan and Frank Zingrone [1995] *Essential McLuhan*, House of Anansi Press Limited (邦訳・有馬哲夫 [2007] 『エッセンシャル・マクルーハン』NTT出版)
- W. Terrence Gordon [1997] *McLuhan for Beginners*, The English Agency Ltd. (邦訳・宮澤淳一 [2001] 『マクルーハン』筑摩書房)
- Christopher Horrocks [2000] *Postmodern Encounters Marshall McLuhan and Virtuality*, Icon Books Ltd., Cambridge (邦訳・小畑拓也 [2005] 『マクルーハンとヴァーチャル世界』岩波書店)
- ゲルハルト・マレットケ [1965] 『マス・コミュニケーション心理学』NHK放送学研究室訳 (日本放送出版協会)
- 竹村健一 [1967] 『マクルーハン理論の展開と応用』(講談社)
- [1967] 『マクルーハンの世界』(講談社)
- [2002] 『メディアの軽業師たち』(ビジネス社)
- 中野 取・後藤和彦・森川英太郎 [1982] 「マクルーハン再考」(『メディア・レビュー』編集部編『ザ・メッセージ』平凡社)
- 佐藤 毅 [1990] 『マスコミの受容理論』(法政大学出版局)
- 浜日出夫 [1996] 「マクルーハンとグールド」(岩波講座・現代社会学22『メディアと情報化の社会学』岩波書店)
- 関口 進 [2000] 『メディア・コミュニケーションの多様化』(学文社)

-
- 竹下俊郎 [2001] 『メディアの議題設定機能』(学文社)
- 服部 桂 [2001] 『メディアの予言者』(廣済堂出版)
- 中田 平 [2003] 『マクルーハンの贈り物』(海文堂)
- 北田暁大 [2004] 『メディアの社会学』(朝日新聞社編『新版・社会学がわかる。』朝日新聞社)
- 露木 茂・仲川秀樹 [2004] 『マス・コミュニケーション論』(学文社)
- 吉見俊哉 [2004] 『メディア文化論』(有斐閣)
- 和田伸一郎 [2004] 『存在論的メディア論』(新曜社)
- 池田理知子 [2006] 『現代コミュニケーション学』(有斐閣)